

三の酉

久保田万太郎

青空文庫

一

——おい、この間、三の酉^{さんとり}へ行つたろう？ ……

ズケリといつて、ぼくは、おさわの顔をみたのである。

——えゝ、行つたわ。 ……どうして？ ……

と、おさわは、大きな目を、くるツとさせた。

——しかも、白昼、イケしやア〜と、男と一しよに、よ……
と、ぼくは、カセをかけた。

——あら、よく知つてゐるわね。

と、そのくるツとさせた目を、正直にそのまゝ、

——おかしいわ。

と、改めて、ぼくのほうにうつした。

——ちツともおかししかアない。……おかしいのはそツちだ……

——みたの、あなた、どツかで？ ……

——そうだろうナ、多分……

——わるいことはできないツて、ほんとね。……けど、どこで

……どこをあるいてるのをみられたろう？

——それよりも、一たい、何ンなんだ、あれ？ ……

——あれツて？

——あの男さ。

——あゝ、あれ？

——顔よりも大きなマスクをかけて、さ。……そんなに、人めがはゞかられるなら、何も、昼日中、あの人ごみの中を、いゝ間^まのふりに、女を連れてあるかなくったっていゝじゃアないか？

——そうだよ。……そう思ったわよ、あたしだって……

——それだったら、なぜ止させなかつたんだ？……ウスみツともない……

——だって、それほどの人じゃアないんですもの。

——それほどの人じゃアない？

——そうよ。

——それほどの人じゃアないのに、君は。……そんな男と、あゝ

して？ ……

——えゝ、そうよ。……一人じやア寂しいから、ヒヨイと出来ごゝろで誘つたら、すぐに附いて来たのよ、あの人……

と、おさわは、ケロリとしたもので

——あたし、戦争がすんだあとでも、まだ、ずツと、上州の田舎に疎開したまんまでいたこと、いつか、話したでしょう？ ……
…その間でも、あたし、お酉さまだけは、毎年、欠さなかったのよ。

——ということは、毎年、わざゝ、そのために、上州の田舎から東京へでゝ来たってわけか？

——えゝ、そう……

——何んだって、また、そんなに信心なんだ、お酉さまが？

……

——信心じゃアないのよ、好きなのよ。

——好き？

——そうなのよ。……好きなのよ、お酉さまが、たゞ……

——だって、好きツてのは……

——おかしいでしょう？ ……そうよ、おかしいわ、わけをいわなければ……

と、自分で、自分をうなずいてみせ

——あたしね。……じつは、これでも、吉原の生れなのよ。

——吉原の？

——知らなかったでしょう？

——初耳だ。

——だって、あたし、だれにも、めったに、いわないんですもの、それを……

——どうして、さ？

——それをいうの、かなしいんですもの……

——といって、そツと目を伏せるようにしたかと思うと

——ウ、フ、フ、フ……

と、急に、おさわは、いかにもおかしそうに、声をだしてわらった。

——ねえ、顔より大きなマスク。……うまいこというわね、あ

なたッて人。……ほんとにそうだったわ、顔より大きかったわ、あのマスク……

二

——何を、つまらない……

ぼくは、わざと、苦い顔をして

——自分で自分のはなしの腰を折る奴もないじゃアないか？

——顔より大きなマスク。……そうなんですもの、その通りなんですもの。……でも、あたしには、うまく、そうはツきりいえ

なかった……

と、おさわは、もう一度、わらい直さなければ承知しなかった。
——セツかく、しんみりしたはなしになりかけたとき、どうして急に、そんなつまらないことをいいだしたんだ？

と、ぼくは、すなわち、その顔をあわれんだのである。

——不思議な女だなア、君ッておんなは……

と、おさわは

——そうでしょう、不思議でしょう？ ……自分でも、ほんとにそう思うの、とき／＼……

と、すぐそれにこたえて

——だって、いま泣いたかと思ったカラスが、すぐもうわらっ

てるんですものね。……どうかと思うわ……

——自分でいってれば、世話アない……

——ねえ、でも、どうしてでしょう？ ……いまだって、あたし、それをいうの、かなしいんですもの、といった途端、何んだかほんとにかなしくなつて、それだけで、もう、泪がでゝ来そうになつたの。……と、そのとき、ヒョイト、あなたのいったマスキのことがおもいだせたの。……そうしたら、さア、急にこんどは、おかしくなつて、おかしくなつて。……つまり、そういう後生樂にできてるのかしら、あたしツて？ ……

——けだし、浮気ものといわれる所以のものも、つまりは……

——いやよ、それは。……それはないわ、浮気ものは……

——でも、赤坂のおさわさんといえ、あゝ、あの……

——浮気もの……というんでしょう、ほかとち外土地の、あたしの逢つ

たことのない人まで……

——という話だね。

——どうして、そう、でたらめなんでしょう、世間の人ツて。

……一人が何んかいうと、知りもしないくせに、それからそれ。

……一たい、あたしがいつ、どこで、何をしたというの？ ……

——まア、いゝよ、それア……

——よかアないわよ。

——じゃア、それは、いずれゆツくり研究することにして、それより、いまの、吉原生れのはなしのさきを、もツとつゞけよう。

……大丈夫だ、これだけ揉めば、もう、かなしくなりやアしないから……

——だめよ、急にそういったって。……こう揉まれてしまつちやア、こんがらかった糸の、どこが……

——わかった、分った。じゃア、ぼくが、アナウンサーの役どころになつて、こツちからいろ／＼聞く。君がそれにこたえる……それならいゝだろう？ ……

——うまいこと聞いてよ……

——うまいこと、参りましたら、御喝采。……ということを知つてるか？

——李彩じゃアありませんか。

——感心！……といいたいが、あの支那手品の高座を知って
いちやア、年が知れるナ？

——知れたつていゝわよ。……どうせ、もう、来年は四十六。

……いよく五十の坂のかげが、目のまえにチラ／＼しかけて来
たんだから……

——何んだ、そんなになるのか、もう？……

——何んだ、まだそんなものかと被^{おっしや}仰ったほうがいゝわ。

——止そうよ、もう、漫才は。……色気がなさすぎる……

——どうして、こう、テレ性なんだろう、あたしツてものは？

——デ、吉原デ生レテ？

と、ぼくは、いそいで、おさわの口をふさいだ。……どうし

て、君ツてものは、そう、自分を引ツ搔きまわさなくつちやア氣がすまないんだ？」という代りに……

——ハイ、吉原デ生レテ、吉原デ育チマシタ。

と、しかし、おさわは、翻然、すぐにぼくの誘いの波にのつた。

——家ガ仲ノ町^{ウチ}デ、引手茶屋ヲシテイマシタカラ……

——ソレガ、ドウシテ、後ニ、赤坂ダノ、葭町ダノ、住人ニナリマシタカ？

——震災デ、家ヲ焼カレ、^{フタオヤ}両親ヲナクシテ、一人ボツチニナ

リ、ワルイ親類ニダマサレテ、^{ゲイシャ}芸妓ニウラレ……

とまでいいかけて、急に

——馬鹿らしい。……よししょうよ、もう、対談ごツこも……

…

おさわは、わらえもしない、といったような顔をした。

——しかし、震災で、家を焼かれたのはいゝとして……
と、ぼくはいった。

——両親をなくしたというのは、矢つ張？ ……

——震災でよ。……廓くるわの中の花園池に入つて死んだのよ。酷ひどか

つたのよ、それア、そこで死んだ人の数だけだつて。……家中み
んな、一しよに逃げたんだけど、途中ではぐれて、偶然、ほかの
方角へ逃げたんで助かつたのよ、あたし……

——と、お父つあんやおつ母さんばかりで、家中、ほかのもの
もみんな？ ……

——そうでもないのよ。……なかに一人、年ちゃんという、あたしと仲のよかった抱えのお酌さんがいてね。……この人も、花園池に入らなかったばかりに助かったわ。

——そのとき、いくつだった？

——あたし？ ……あたし、十四。……女学校の一年。……お下げて、それア、可愛かったわよ。

——女学校へ行ったのか、お茶屋のむすめが？ ……

——行ったわよ。……どうして？ ……

——だって、釣合わないじゃアないか、吉原に女学校は？ ……

…

——知らないのよ、あなたは。……あゝいうとこの家庭ほど、

ヘンにうるさいものなのよ、子供の教育のことなんかにかけて。
……ことに、うちの父と来たら、大ていの堅気よりもきびしくつ
て、あたしがその年ちゃんと仲よくするのさえ、いゝ顔しなかつ
た位。……一つには、引手茶屋なんて稼しょうばい業は自分一代のもの
で、いつまでやってるものでもなければ、また、いつまでやって
行けるものでもないと思つてたらしいのね。……ということは、
吉原なんてものは、いつかはなくなる。……それには、娘を、う
んと仕込んで、いゝところへかたづけて……

——つまり、インテリだったんだナ、いまでいえば……

——そうなのよ。……だつて、一度か二度、浅草の区会議員に
なつたことさえあるんですもの。

——すしやのむすめでなくって、区会議員の娘か？

——その娘がどうでしょう、十五の春から四十台の今日が日ま
で、三十年、ずツと芸妓をして来てしまったんですものね。……
あきれるわ。こうと知ったら、あのとき、花園池で、親たちと一
しよに死ぬんだったわ。……そのほうがよかったわ……

——必ずしも、そうもいえないだろう？ ……生きていてよか
ったと思つたことだつてあつたらう？

——それアね、長い三十年のあいだですもの、二度や三度あつ
たわ。……でも、いまになつてみれば、夢よ、みんな。……水に
映つた月みたようなものよ……

——そういつたら、しかし、だれだつてそうだ。……人間のー

生なんてものは、はじめツから、そういう風にしくんであるんだ

……

——ところが、世間には、そうでない人もいるから口惜しいのよ。……いまいった年ちゃんツて人ね？

——うん。

——この人なんか、しみ／＼、生きてゝよかった人よ。……あのとき、死なゝかったばかりに……助かったからこそ、いまのような幸せな月日に逢えたんだわ……

——附合ってるのか、いまでも、その人と？

——あたし、この人の疎開してたところへ、この人をたよつて疎開したのよ。……遠くにいるもんで、逢うのはタマだけれど、

手紙のやりとりは、始終、してるわ。

——どこにいるんだ、いまは？

——鎌倉。

——何をしてるんだ？

——結婚して、ちゃんとやってんのよ。……あなた、知らない、

柴、白雨ツて絵を描く人？ ……

——柴、白雨？ ……知ってるよ、名前は。……むかしは、岸

田劉生なんかの仲間の洋画家だったが、いまは日本画ばかり描いている……

——その人の奥さんなのよ、年ちゃん、いま……

三

……逢うのはタマだけれど、といった口の下で、すぐにこういうのはおかしいが、といいわけしいく、おさわは、そのあとで、じつは、四五日まえ、鎌倉に年ちゃんを訪ね、引きとめられるまゝ、一晚、泊ってさえ来たというはなしをした。……いかにその年ちゃん夫婦の仲がいゝかということ、そして、その家庭の空気の、いかに、しずかに、和やかに落ちついていくかということ、を、事細かに、いち／＼例をあげて褒め上げた。……そのなかで、とくにぼくの心に止ったことは、夕方、年ちゃんと、年ちゃんの

旦那の白雨さんと三人で、食事の仕度のできる間、海のみえるところまで、ぶら／＼、あるきにでたことについてだった。……年ちやんの家は、材木座で、細い砂みちづたいに行くと、海まで一丁となかった。

——あツといって、あたしおもわず立留ったのよ……

と、おさわは、やゝ大仰に、胸を反らしてみせたのである。

——どうして？

と、勿論、ぼくはわらった。

——だって、あなた、その海の波のいろ。……青いなんてものじゃアないの。……紺なの。……びつくりするような、何んともいえない、凄いいろなの……

——じゃア、もう、そのとき、日が落ちていたんだろう。

——でも、まだ、空はあかるかったわ。……それだけに、よい……一層、それが際立ってみえたのかも知れないのね。……途

端に、あたし、おもいだしたの。

——何を？

——熊谷^{くまがい}の芝居の、組打^{くみうち}”んとこのあの海の道具を……

——違うよ、矢つ張、二長町仕込は、いうことが……

大正期の、菊五郎、吉右衛門という二人の若い役者。……その人気によって盛り上げられたいわゆる市村座時代は、また、東京の、新橋、赤坂、葎町、柳橋といった、それ／＼の花柳界にとっても黄金時代だった。……おさわの、たま／＼いったその組

打”の海の一言は、ぼくに、ゆくりなく、ありし日の、自動車のまだめずらしかったころの東京の人情をおもいださせたのである。

で、そのあと、三人が家へ帰ると、茶の間には、もう、あか／＼と眩しいほどのあかりがついて、大きなチャブ台の上に、のり切れないほどの、たくさんの料理の皿が並んでいたばかりか、長火鉢の、たツびつにつがれた火のうえにかゝった鍋の中には、みるから食欲をそゝるおでんが、ふつ／＼と煮えていた。

そして、それらの、さかなやかからとゞいた鯛の刺身だけを除いて、あとは、みんな、台所のばアやの手ごしらえばかりと聞いて、おさわの、どんなに驚いたことか……

——さ、何んにもないけれど……

と、白雨さんは、自分で銅壺からチロリをだして、
“まア、一
つ……”とついでくれ

——このおでんだけは、いさゝかわが家の自慢でね……
といった。

——ほんとよ。……ほんとにそうなのよ。

と、年ちゃんも、その尾について

——何がいゝ？ ……とつて上げるわ……

——じゃア、すじと、お豆腐を……

——大根は、どう？ ……よく煮えてるわ……

——だんく〜にいたゞくわ。

なるほど、自慢だというだけのことはあつた。……一口、口に

入れて、すぐにわかった。

——結構ねえ。……たゞじゃアないわ、このお味……

おさわは、世辞でも、けいはくでもなくいった。それほど、ほんとに、おさわは、平常^{ふだん}は嫌いで喰べたことのない、その野菜の煮込に感心した。

——外のものにも、好きに、さア、箸をつけて……

と、白雨さんは、チロリをとり上げては、おさわの猪口を一ぱいにした。

——だめですわ。……そうはいたゞけませんわ。

——まアいゝさ……今夜は、もう、あとは寐るばかりなんだから……

——遠慮しちやア、だめよ、おさわさん……

と、年ちゃんも口を添えた。

——遠慮なんかしないわ。

と、おさわはまけずに応えた。

三人だけの、水入らずの宴会は、かくて九時すぎるまでつづいた。

白雨さんは、酔えば酔うほど、機嫌がよくなった。

それを、また、とき／＼はたしなめつゝ、しかも、決して、

無理から切上げさせようとはしない年ちゃんの顔のあかるさ……

——これだ、これなんだ、これでなくっちゃアいけないんだ……

：

と思つたら、おさわは、急に胸が一ぱいになった。……何が、これだ、これなんだ、これでなくっちゃアいけないんだ、か、自分にもよく分らなかつたが……

あくる朝、寝坊のおさわが、何んと、八時まえに目をさました。しかし、そのときには、もう、年ちゃんは、エプロンをかけて、台所を出たり入ったりしていた。白雨さんは、庭にで、犬にかかつていた。

風の加減か、昨日はきこえなかつた波の音がしていた。

——お早うございます。

と、おさわは、いさゝかキマリわるく、縁側に膝を突いた。

——お早う……

と、白雨さんは、元気のいゝ声で

——いゝ天気ですよ。……きょうの三の酉は大あたりだ……
と、問わずがたりにいったので……

四

——何んだ、それで分ったのか、その日、三の酉だつてことが

……

と、ぼくは、わざと、からかい面^{づら}にいった。

——あら、そうじゃアないわ。

おさわは、まがおで

——いけない、早く帰らなくっちゃア。……うかくしてたら、
また、帰りそこなう。……そう思ったゞけよ。……だって、どこ
にも、一ぱい、日があたって、それアのどかだったんですもの……
……

——で？ ……

——で。……でも、矢つ張、何んのかの、お昼すぎになつてしまつたわ。

——マスクの先生とは、どこで、それから逢ったんだ？

——電車のなかで……

——というと、その帰りの？ ……

——えゝ、そう、横須賀線の……

——勿論、まえから知ってるお客なのだろうが？ ……

——えゝ、もう、知ってることは二三年まえから。……けど、どツかの会社の重役さんというだけで、じつは、名前もよく知らないの。……外の人が、シイさん、シイさんといってるから、一しよになつて、シイさん、シイさんといってるだけ……

——そんなバカなことが……

——あるから不思議よ。……うた沢をうたうんで、時おり、そのお相手を仰せつかるだけ。……声はいゝのよ。……一寸^{ちよつと}、素^し人^{ろと}ばなれがしてるのよ……

——^{さき}先方でみつけたのか、君のほうから声をかけたのか？

——両方。……両方、同時に。……あたしが“まア”と思わず
 いったとき、先方も“やア”といったのよ。……一つには、大へ
 ん空いた電車^すで、どこもかしこもガランとしてたもんで、それで
 すぐ分ったのよ、あたしにしても、先方にしても……聞いたら、
 逗子から乗っていたのよ、先方は……

——で、空いていたから、一応、仁義として、側へ行つてすわ
 った。……“いゝお天気ですわねえ”と、まず、君のほうからい
 った……

——御名答……

——女のほうから口をきられて、だまつてる男はない。……す
 なくも、“そうだね”とか、“ほんとにね”とか、返事をした

にちがいない。……ことに相手が、うた沢の如きをたしなむタマ
だつたら、たちまち、それからそれ口がほぐれて、雪のあしたの
煙草の火、寒いにせめてお茶一ぷく、それが高じて酒さき一つ……

——何、それ？

——“琴責”の阿古屋がいうじやアないか？

——ものしりね、あなた……

——はぐらかしたつて駄目だよ。……そうにちがいないんだか
ら……

——そうよ、その通りよ。……話をしているうちに、だんく
その人に好意がもてゝ来たのよ。……何んだか、それツきりでわ
かれちやアわるいような気がして、“お酉さまへ行つてみません

？”と、いつてみたの。……そうしたら“うん、行ってもいゝ”
……

——だもの。……浮気ものといわれても仕方がない……

——浮気なんてもものじゃアないわよ、出来ごゝろよ、ほんの……
……

——浮気や、その日の出来ごゝろ、と、むかしツから相場はき
まっている……

——あら、でも、それア……

——でも、あゝして、肩を並べて、しかも男のほうがマスクを
かけてあるいてるんじゃないや、どうしたって、たゞじゃアないよ、
あの二人は。……おなしことでも、あれ、女のほうがマスクをか

けていたら、どうだろう？ ……そのわりに、いやらしくないかも知れないナ？

— どうして？

— どうしてツてわけもないが、感じの上で。 ……すくなくも、あるいは、ちゃんとした夫婦として、人が彼これ思わないかも知れないナ。

— そうかしら？

— で、どうした、あれから？ ……どこへ行つた？

— 金田へ行つて、トリを喰べたわよ。

— それから？

— 右とひだりにわかれたわよ、それで……

——よく、承知したナ、男が？

——承知するもしないもないわ。……金田の勘定、あたしが払ったんですもの。

——相手が重役だっていうのに？

——重役だツて、何んだツて、こツちからさそつたんじやアありませんか。

——よく、しかし、だまつて払わしたナ？

——それア、当節の、名刺の肩書だけの重役ですもの、そんなことは平気よ。逆に、女に、立引たてひかした位におもつたでしょう。

……いゝえね、ほんというと、もう少しどうにかなつた男だと思つたのよ、はじめ、電車の中では。……そうしたら、下りたら、

早速、マスクでしよう？ ……それで、一度にガツカリしたら、金田へ行けば行つたで、金田ツてうちが、どんなうちだかつてことも知らない唐変木なんですもの。 ……うた沢だけ、それも稽古したゞけのことをうたわしてさえ置けば、それでいゝタマだということがハッキリ分つたの。 ……それア、あなたのまえだけど、金田にいたあいだの辛かった、つらかつたこと、トリの味なんか、まるツきりわからなかったわ。 ……昨夜ゆうべのおでんはうまかつたナ ……と思つたら、もういけません。 ……しみ／＼、かなしくなつたわ、あたし、心の住すみ処のないことが ……

五

——さて、と……

と、ぼくは、三本目の銚子のやゝかつたるくなつたとき

——何んか喰おうじやアないか。……しやべつたら腹が空^へつた

……

と、おさわにいった。

——何を上ります？

と、おさわは、火鉢のうえにふせた目をあげた。

——何んでもいゝ。

——じやア、何か、お鍋のもの……

——いゝだろう、それも。……おとゝいの晩はおでん、昨夜はトリ。……それだったら、今夜も、ことのついでに……

——チリにしましょう、チリに……

と、すぐに決めて、おさわは立つた。

——いゝじゃアないか、自分で立たなくつても……

——ついでに、一寸、電話……

——どこへ？

——家へよ。

おさわは、襖をあけ、しずかに出て行った。……そのうしろつきに、二十年まえ、三十年まえの芸妓の、裾をひいたすがたが感じられた。

突然、はげしい風が、庭の木々をゆすつてすぎた。

——心の住処……

ぼくは、おさわの、いまいったことを、口の中でいつてみた。

——何んだって、しかし、かの女……

と思つて、ぼくは、何んということなし、口に運びかけた猪口を、下に置いた。

——外は、いゝ月よ……

と、やがて、新規の銚子をかゝえて、おさわは歸つて来た。

——よく天気をつゞくことよ。

——ほんとに。……けど、三の酉がすぎると、すツかり、もう、冬のけしきだからうれしいわ。

— 好きか、君は、冬が？ ……

— 大好き……

と、おさわは、熱い爛の、その新規の銚子をついでくれた。

— ねえ。

と、ぼくは、ついでもらいつゝいった。

— 来年は、一つ、一しよに行こうか。

— どこへ？

— 酉のまちへさ。

— えゝ、行きましょう。

— 松葉屋でゞも時間をつないで、景気よく、宵よいどり酉と行こう。

— それは、嫌……

——どうして？

——あたしはね、三の酉の昼間行くんでなくつちやア嫌……

——そんなこといつて、来年、三の酉がなかったら？……

——だッたら、二の酉でいゝわ。……どツちにしても、はつ酉はいやなの、にぎやかすぎて……

——昼間でなくつちやアいけないという理由は？

——昼間、あの人込みの中をあるいてると、死んだ父だの母だのが、どこからか、ヒョックリ、でゝでも来るような気がしてなつかしいの。

——そうか、じゃア、昼間にしよう。

——その代り、マスクをかけるわ。

——だれが？

——あたしが。

——何んのために？

——あなたのためによ。

——と、おさわは、ニツコリ、きれいな歯をみせてわらって、

——一日だけ、あなたの奥さんになって上げるのよ。

——あなたの奥さんに？ ……

——あなた、いま、いったじやありませんか、女のほうでマ
スクをかけてると、ちゃんとした夫婦として、人が彼これいわな

い……

——あゝ、それか……

——その代り、
帰りの金田の勘定は、
リッパにあなたが払うの
よ……

六

……おさわは、
しかし、その年の西の市の来るのをまたずに死
んだ。……二三年まえのはなしである。

たか／＼とあはれは三の酉の月

というぼくの句に、
おさわへのぼくの思慕のかげがさしている

： という人があっても、ぼくは、決して、それを否^{いな}まないだろう：

（「中央公論」一九五六年一月）

青空文庫情報

底本：「春泥・三の酉」講談社文芸文庫、講談社

2002（平成14）年8月10日第1刷発行

底本の親本：「久保田万太郎全集 第四卷」中央公論社

1967（昭和42）年4月15日

初出：「中央公論」中央公論社

1956（昭和31）年1月

入力：kompass

校正：門田裕志

2014年1月1日作成

2014年6月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

三の酉

久保田万太郎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>